

自分を信じて — 障がい者自身によるSオリンピックスの記録 —

松本侑壬子・ジャーナリスト

2005年2月、長野で開かれた知的障がい者のスポーツの祭典「スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野」。世界中から集まった取材陣の中に、初々しい9人の撮影クルーの姿があった。

「僕たちは自分の目で世界を見る」を合言葉に、大会参加者自身でもある男女9人の若者が、半年の訓練を重ねて、今、晴れの舞台にカメラを構えて参加しているのだ。知的障がい者がこんな大きな世界大会の取材なんかできるのか。前代未聞の挑戦はしかし、自らやりたいという強い意思の下で、カメラを触ったことも覗いたこともない段階からプロの指導を受けながら、見事半年で取材チームとして機能し、自分たち自身の手で大会の記録映像を撮り上げたのだ。

これは、その一步一步試行錯誤を繰り返しながら一人前のカメラクルーに育っていく若者たちの懸命な姿を追った記録映画。製作も兼ねる小栗謙一監督以下スタッフは、驚くべき忍耐強さで若者たちの気持ちに寄り添い、文字通り手取り足取りカメラや撮影機材の操作を教えていく。懸命な主役たちに伴走するテレビマン/ウーマンらの、気長だが絶対に手を抜かない指導ぶりが印象的だ。

若者たちが撮った映像の魅力、いや、その前に、ビデオカメラのファインダーを覗く気迫に満ちた真剣な眼差しは、まさに映像の狩人だ。カッコいい、と思わず拍手したくなる。そして、問いかけずにはいられない。「障がい」って、何だろう。「障がい者」って、誰のことだろう、と。

小栗監督にとって、スペシャルオリンピックス

の映画はこれが3作目。『エイブル』『ホストタウン』の前2作が、知的障がい者自身の懸命な生き方やその姿を通して彼らの可能性を探ったのに比べ、本作は、障がい者自身が一步踏み出し自ら取材者となって、他の障がい者の健闘する姿を共感込めて映像に記録する。楽しいばかりではない日もあるが、励まし合いながら目的に向かって挑戦する逞しい姿を描いているのが特徴だ。

最初に、合宿しながら仲間づくりと機材に慣れていく場面から、私のようなカメラの素人でも一緒に習いたいな、と思わせるわくわくする緊張感と楽しさが伝わってくる。そして、いよいよ大会本番当日、彼らが揃いのスノウ・スーツ姿でカメラ機材を手にゆっくりと登場する場面では、一瞬ハリウッド映画の宇宙飛行士の一群を連想してしまった。カッコいいったら、ないんだもの！

障がい者だから何もできないのではなく、「できないだろうと思ひ込んだ社会ができなくさせているのだ」(監督)の信念が、ついに「彼らと一緒に映画を撮りたい」思いを本作で実現させた。題名のビリーブとは、信じること。未知のことに挑戦する自分自身を信じること、やろうとする気持ちを信じること、障がいがあるうとなかろうと、未来を信じること、人と人のつながりを信じること…。すべてこの作品にしっかりと描き込まれている。愉快で楽しく、励まされる映画である。製作総指揮の細川佳代子さんは、長年のスペシャル・オリンピックス支援活動で、2005年度エイボン女性大賞を受賞した。



日本映画 (109分) / 小栗謙一監督

『ビリーブ Believe』

1月21日よりシアター・イメージフォーラム(東京・渋谷)、ほか全国順次公開

